

DATA

エリア：利尻礼文サロベツ国立公園
所在地：北海道天塩郡豊富町
着手：H14

再生目標

高層湿原…………… 国立公園指定時（昭和49年）の植生やその広がり状況をイメージし、当時の状況を残す箇所を標準とし、これを目標とする。

ペンケ沼…………… 現況の維持を目指す。（これ以上埋塞が進まない状態）

泥炭採取跡地…………… 湿原植生の再生・創出を図ることを目指す。

砂丘林湖沼群…………… 生態系を保持するために水位低下を抑制することを目指す。

上サロベツ自然再生協議会

概要：国立公園であるサロベツ湿原と農地が隣接する北海道豊富町において、農業と共に存した湿原の再生を検討。

設立日：H17.1.19

全体構想作成日：H18.2.2

実施計画作成日：

- H18.7.13（緩衝帯・沈砂池／豊富町・北海道開発局ほか）

- H21.7.2（環境省 H30.6.16 変更）

- H24.5.28（稚内砂丘林／林野庁）
(R4.3 現在)

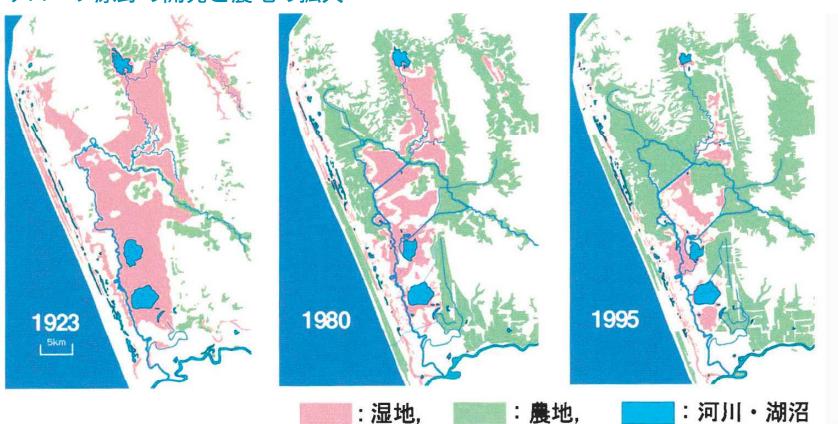


コモチカナヘビ



ツルコケモモ

サロベツ原野の開発と農地の拡大



サロベツ原野は、その起源が日本海に面した沿岸部の砂丘帯と宗谷丘陵に囲まれた潟湖（古サロベツ湖）にあり、これに流入する古天塩川とその支流の相互作用を受けながら、泥炭が堆積して形成されており、低平地における国内最大の高層湿原となっています。

湿原では、ミズゴケ、ツルコケモモ等が生育する高層湿原が広がり、サハリンと北海道の動物分布境界を象徴するとされるコモチカナヘビが確認されています。また、水鳥の渡りの中継地として利用され、近年はタンチョウの繁殖が

確認されるなど、特色のある生態系・自然環境を形成しています。

しかし、周辺の土地利用の変化に伴い、湿原において地下水位の低下や乾燥化、地盤沈下が発生し、これにより高層湿原が減少しササやヨシ等が侵入するなどの現象が生じています。

一方、泥炭地からなる周辺農用地においては、湛水や過湿被害等により生産性が著しく低下しています。このため、湿原の消失と劣化、農業との両立などの、課題解決に向けた自然再生の取り組みを進めています。

対象地域



関連ホームページ

自然再生の手法

- ▶ 地下水位の低下抑制→①
- ▶ 泥炭採取跡地の復元→②
- ▶ 農地と湿原の緩衝帯等の整備→③

農地と湿地の間には、主に地下水を要因として、相互に影響し合う強い関係がみられ、農地においては適度の排水を確保しつつ土砂流出を防ぐことが求められています。一方で、湿原においては地下水位の上昇とその安定化を図ることによって乾燥化を防ぐことが求められています。このため、既設の水抜き水路を埋め戻し、湿原植生を再生する事業を行っています。

また、農地と湿原の境界付近では、北海道開発局を中心に緩衝帯が整備されました。

① 水抜き水路の堰上げ等による地下水位の低下抑制

既設の水抜き水路を埋め戻し、排水を抑制することで湿原の乾燥化を防いでいます。また、埋め戻し後は、地下水位と植生の変化について継続的に調査しています。



水抜き水路の埋め戻し



埋め戻し工のイメージ

② 泥炭採取跡地における湿原植生回復

初期の泥炭採取跡地では、経年変化に伴いミズゴケが発達する等、湿原植生の回復がみられています。しかし、採取跡地の多くは大きな開水面や植生回復の進まない部分が残っていることから、湿原植生の再生・創出の具体的な手法を検討しています。



浮島に生育する
ナガバノモウセンゴケ



泥炭採取跡地

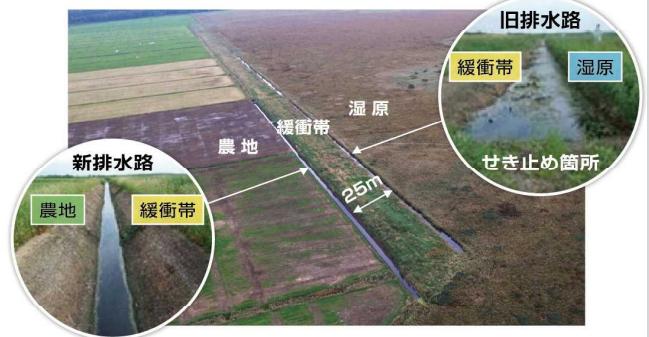


植生回復試験

③ 農地と湿原の緩衝帯等の整備

農用地と湿原が直接隣接する箇所の内、湿原の地下水位に影響を及ぼしていると推察される農用地側に緩衝帯を設定し、湿原の乾燥化を抑制しています。また、整備する農業用排水路に設置される沈砂池を適正に維持管理することで、農用地から河川に流出する土砂を軽減しています。

緩衝帯のイメージ



ここに注目！ 農業と湿原が共生することできる緩衝帯の設置

湿原の保全のために農業者が農地を提供する形で整備された緩衝帯は、約 10km もの延長に渡り、農業と湿原の共生に向け機能が発揮されています。緩衝帯を作ることは、農業者の自然環境への意識の醸成にも繋がりました。

自然再生事業の効果

水抜き水路を埋め戻したことによって涸れていた落合沼の湛水が回復し、周囲の湿原の地下水位が上昇しています。

また、泥炭採取跡地では、植生ネットを敷いたことによって湿原植生の回復の兆しがみられています。



湛水が回復した落合沼



泥炭採取跡地の植生回復